令和元年度 月刊 校長通信 11号

（生徒・保護者版） R2.2.27（2月号）

俊英NOW

●全国スキーインターハイ 渡辺愛蓮選手（1年6組）全国優勝

1年生渡辺（長野俊英） 攻めて圧勝

県勢28年ぶり女子回転V「狙っていった」

女子回転で県勢28年ぶりの優勝を飾ったのは1年生の渡辺だった。「年齢は関係なく、（優勝を）狙っていくつもりだった」と攻めの滑りに徹し、2位に1秒22差をつける圧勝。「納得いくレースができた」と満足した。

1番スタートの1回目で流れをつかんだ。今大会のコースは雪面が軟らかく、「（前を滑った）人のラインが強く残り、それに惑わされて思ったように滑れなくなりがち。でも1番スタートで自分の思い通りにいくレースができた」と満足した。

女子回転 攻めの滑りで初優勝を手にした渡辺愛蓮（長野俊英）

1番スタートの1回目でつけて首位に立った。大量リードを奪っても守りに入らなかった。「自分の持ち味は誰よりも真っすぐ攻めていけるところ」と渡辺。2回目は30番スタートでコースが荒れていたが、夏場に反復練習を重ねたターンの基礎技術などが生き、斜面変化や最終盤のヘアピンカーブもうまく対応。安定感の増した滑りで、後続を引き離した。

戸隠中3年だった昨年の全国中学大会は、腰痛の影響もあって4位。今季に向けては、腰に負担がかからないよう下半身の筋力強化や体のケアに一層気を配ったことで、継続して練習を積めた。

表彰式後は、韓国で開かれるファーイーストカップに向け慌ただしく出発した。3月には世界ジュニア選手権（ノルウェー）に出場する。「海外の選手に（どれだけ通用するか）挑戦したい」と渡辺。高校日本一に輝いた女王の視線は、より広い世界へと向けられている。

（早戸 達哉）

2月7日、新潟県妙高市赤倉高原で行われたインターハイ女子回転競技で、本校1年6組渡辺愛蓮さんが全国優勝を成し遂げました。2位に1秒22の大差を付ける圧勝でした。3月にはノルウェーで行われる世界ジュニア選手権に日本代表として出場します。今後の活躍に期待します。

●信濃毎日新聞 より

苦しむ人に寄り添う自分に

10代

昨年10月に日本に上陸した台風19号はとても強い勢力で、長野県など各地が大きな被害を受けました。これから先のことを考え、不安を感じている被災者の方も多いと思います。

2011年に起きた東日本大震災では、生活を再建するめどが立たなくなって自らの命を絶ってしまった人がいたということを、当時宮城県に住んでいた人から聞きました。私はこの話を聞いて「せっかく助かった命だから、生きてほしい。何か自分にできることはないのか。もし不安を少しでも和らげることができたら、助かる命があるかもしれない」と思いました。とにかく何かをしてあげたいのですが、今はまだ、ただ思うだけという状態です。

私は今、いろいろな苦しいことと闘っています。苦しいと感じることは人それぞれ違いますが、私はなんとか今を乗り越えたいと思っています。

そして、いつか苦しい思いをしている人たちに寄り添い、苦しみを和らげることができるような人になりたいと思います。

長野市 長友 沙紀

（高校生・18）

校長ESSAY

姜尚中さんとのツーショット

姜尚中さんは有名な政治学者で、コメンテーターとしてよくテレビにも出るので知っている人も多いでしょう。彼とのツーショット写真があります。といっても集合写真のトリミングですが、私お宝の一枚です。これは2011年10月8日、伊那弥生ケ丘高校創立100周年記念式典の記念写真です。当時、私は伊那弥生ケ丘高校の校長で、創立100周年記念式典の記念講演の講師を姜尚中さんにお願いすることになりました。姜さんに講師をお願いするに当たり、私はどうしても姜さんに伝えたいことがあり、手紙を出しました。100周年記念とはいえ、姜さんが超多忙なスケジュールを割いて一地方の高校のイベントに来てくれたのは、この手紙のせいではないかと、今でも密かに思っているのです。

姜尚中さんは熊本県出身、戦前に日本に移住した韓国人夫婦の間に生まれた韓国二世で（日本名は、永野鉄男）、貧困に苦しみながらも、苦学の末に東大教授となり、政治学者として穏健リベラルの立場から日本社会の動向にさまざまな提言をしてきました。姜尚中さんが理想のリーダーとして尊敬していたのが、韓国初の革新派大統領となった金大中氏(1925－2009)です。金大中氏は、厳しい政治的迫害、暗殺の危機を乗越えながら独裁権力と戦い続け、ついに韓国大統領となりました(在任1998－2003)。金大中氏は、若いころ最初の妻と死別しています。その人は車容愛といい、少女時代を東京で過ごしました。太平洋戦争の戦況が悪化し、車容愛さんは地方に疎開することになりましたが、その疎開先が長野県の伊那で、伊那弥生ケ丘高校の前身「伊那高等女学校」に転校したのです。私は、手紙でこの事を姜尚中さんに伝えました。さらに車容愛さん在学の頃、伊那高等女学校の生徒たちが名古屋の海軍戦闘機工場に学徒動員され、うち一名が爆撃の犠牲になったことも書き加えました。姜尚中さんが、わざわざ伊那弥生ケ丘高校創立100周年記念式典の講師を引き受けてくれたのは、私が知らせたこの事実があったに違いないと思うのです。

式典終了後、姜尚中さんは連載していた二つのコラム（信濃毎日新聞と雑誌『アエラ』）で伊那弥生ケ丘高校100周年のことを「見えない糸」として紹介してくれました。姜尚中さんにとっての「見えない糸」に、私がわずかながらでも絡むことができたならこんなにうれしいことはありません。このささやかな交流が、私にとっては人生の宝物です。

〈今日の視角〉 2011.10.14

見えない糸

姜尚中

今月8日、私は伊那弥生ケ丘高等学校の創立百周年を祝う記念講演の講師として招待された。校舎は東西駒ケ岳と仙丈ケ岳に囲まれ、天竜川の恵みを受けた豊かな伊那の沃野に佇んでいた。校門から続く銀杏並木を眺めていると、わたしは何か見えない糸で結ばれる人生の機微のようなものを感じざるをえなかった。

校長の窪田先生から、前身の伊那高等女学校の時代、金大中元韓国大統領の最初の伴侶であった車容愛女史が学んでいたことを知らされていたからである。金大中先生の自伝『死刑囚から大統領へ』（岩波書店）には、妻の車女史を亡くした時の悲しみが切々と語られている。

1973年の東京での金大中拉致事件以来、金大中先生の波乱に富んだ生涯は、韓国の激動の現代史と重なり、私もその波濤の飛沫を浴びながら青春時代を過ごした。そして晩年、父親と息子ほどの歳の差がありながらも、親しく先生の警咳に接する機会に恵まれたのである。先生との見えない糸は今も切れずに続いているのかと思うと、感無量であった。

そしてさらに驚いたのは、車女史をはじめ、伊那高等女学校の女学生たちが、敗戦間際の昭和19年から20年にかけて、学徒勤労動員で名古屋の軍需工場で海軍軍用機の生産に従事していたことである。実はこの頃、私の父も名古屋の軍需工場で働いていたのである。生前の父の話では、そこは海軍軍用機を生産する工場であったらしく、同じ工場であった可能性も考えられる。名古屋空襲で一宮市に逃れた父と母は、一粒種の息子（長男）を亡くしており、父と母にとって名古屋での体験は終生、忘れることができなかったはずだ。

こうして伊那の地での一日は、過去は死なず、今を生きる者たちと見えない糸で結びついていることを実感させることになったのである。